

間語り考

——能〈三山〉における間狂言の役割——

田崎未知

はじめに

能の劇中において、狂言方が担当する役とその演技を「アイ」もしくは「間狂言」と呼ぶ。最も一般的なもの、二場物の能で前シテの退場後、後シテの登場までの間をつなぐ役である。狂言方扮する所の者が、ワキ方扮する僧の問いに答えて、シテ方扮する役にまつわる物語の補足解説を行う「間語り」をする。そしてこの「間語り」によって、能の本説が明らかとなり、曲全体の統一がなされているのである。能〈三山〉においても狂言方の扮する所の者が「間語り」をする。能〈三山〉は、作者と成立年代ともに不詳の曲である。『能本作者註文¹』や『二百拾番謡目録²』は、ともに世阿弥の作とするが根拠はない。現在では、観世、宝生、金剛の三流で演じられるが、従来は宝生のみで演じられてきた。³

この曲は素材として『萬葉集』巻一に収められている「中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首」(以下三山歌と略す)の香具山は 畝傍雄雄しと 耳梨と 相争ひき 神代より かくにあるらし 古も 然にあれこそ うつせみも 妻を 争ふらしき⁴

という歌を踏まえ、同書卷十六所収の「有由縁并雑歌」の二男が一女、櫻兒を争い女が首をくくる伝説⁵や、三男が一女、

鬘兒を争い女が身を投げる伝説⁶とを絡ませている。この典拠との関係で問題になるのが、三山になぞらえた関係における性別の問題である。三山歌では、香具山を女に、畝傍山と耳成山を男に見立て、一女二男の妻争いとしてしているが、能〈三山〉は、香具山を男に、畝傍山と耳成山を女に見立て、一男二女の三角関係に置き換えて描いている。そこで重要な役割を果たすのが「問狂言」である。能〈三山〉では「問語り」において、鎌倉時代の萬葉学者の仙覚の説などを紹介しつつ、『萬葉集』の内容と本曲独特の物語の展開とを取り持つ、重要な役割を果たしている。

本稿では、能〈三山〉における問語りの果たす役割と問狂言台本の詞章比較を検討していきたい。

一 能〈三山〉の物語と『萬葉集』

能〈三山〉は次のような筋立てを持つ。

融通念仏宗の布教のため大和国に着いた良忍上人（ワキ）は、所の者（アイ）に大和三山を教えてもらう。そこへ里の女（前シテ）が現れ、『萬葉集』を引いて大和三山の話をする。香具山に住む、かしはでの公成という男が、耳成山の桂子と畝傍山の桜子とに通っていたが、いつしか桜子へ気持ち傾いてしまった。これを恨んだ桂子は耳成の池に身を投じたことを物語る。里の女は名帳に名を入れて欲しいと頼み、自分は桂子であると名乗って消える。（中入）。所の者が再び現れ、良忍上人に乞われて大和三山について物語る。所の者は、里の女の正体は桂子の亡霊であろうと推量し、上人に亡霊の回向を勧めて立ち去る。上人が桂子の跡を吊っていると、憑き崇っている桂子の恨みを払って欲しいと、桜子の亡霊（ツレ）が現れる。そこへ桂子の亡霊（後シテ）も現れ、後妻打ちをして恨みを晴らす。やがて心を静め、上人に回向を頼んで姿を消す。

この能の素材となる和歌が『萬葉集』巻一にある。⁷

中大兄 近江宮御宇天皇 三山歌一首

中大兄 近江宮に天の下治めたまひし天皇 の三山の歌一首

高山波 カクヤハ 雲根火雄男志等 ウネビヲラシト

香具山は 畝傍雄雄しと

耳梨与 ミミナシト 相諍競伎 アヒラシキ

耳梨と 相争ひき

神代從 カミヨヨリ 如此尔有良之 カケナララシ

神代より かくにあるらし

古昔母 イニシヘモ 然尔有許曾 シカナレコソ

古も 然にあれこそ

虚蟬毛 ウツセミモ 孀乎 ツママ

うつせみも 妻を

相捨良思吉 アラソフラシキ

争ふらしき

この歌は、香具山を女に、畝傍山と耳成山を男に見立て、人間社会と同じく神々の世界にも妻争いがあつたことを歌っている。前シテである里の女のセリフに「總じてこの山は。萬葉集第一に出だされたる三山の一つなり。耳なし山ともみなし山とも。語るによりて妄執の。由ある昔の物語（語）。」とあることから、『萬葉集』に依拠していることは間違いない。

二 能〈三山〉と萬葉学説

『謡曲大観』概評において、能〈三山〉創作の発想が大和三山の妻争い説話にあることが指摘されている。⁹⁾

三山妻争ひの説話を原形のままに採らないで、櫻兒、鬘兒の傳説と織り交ぜ、それらの傳説が、二男又は三男が一女を争ふものであるのを、一男が二女に通ふことに作りかへ、更に室町時代の世相に合はせて、後妻打ちのことを思ひついたのは、誠に面白い構想である。

この曲が『萬葉集』巻一に収められている三山歌をふまえ、同書卷十六「有由縁并雜歌」詞書の櫻兒と鬘兒の伝説をかまらせ、さらに前妻が後妻を嫉妬して叩く、後妻打ちの習俗を採り入れて創作したと指摘している。

三山歌について、鎌倉時代の万葉学者である仙覚は『萬葉集註釋』¹⁰において「シカルニカク山ハ、女山也。畝火山ト、耳梨山下ハ男山也」とし、耳成山（男）からの懸想を香具山（女）は受け入れる様子であったが、その後には畝傍山（男）から懸想されると、畝傍山が姿も雄々しく良かったので、これに心が移ってしまった。そして耳成山が先の約束通り、香具山に逢おうとしても、それを受け入れなかった。畝傍山はこのことを聞いて香具山と共に耳成山と戦った。これを「三山の戦い」であるとする。仙覚は、香具山（女）が耳成山（男）から畝傍山（男）へ心変わりしたことを「三山の戦い」の原因とした。

この三山歌は、長歌の「雄男志等」などの訓釈の問題によって、三山を男女に見立てた際の性別が異なる。¹¹

①香具山（女）が、畝傍山（男）を「雄々しい」と思い、耳成山（男）と争いが起きた。

②香具山（男）が、畝傍山（女）を「愛し」と思い、耳成山（男）と争いが起きた。

③香具山（女）が、畝傍山（男）を「雄々しい」と思い、耳成山（女）と争いが起きた。

能〈三山〉における三山の性別は、次のような構成を取る。

④香具山に住む、かしはでの公成（男）が、畝傍山の桜子（女）に気持ち傾き、耳成山の桂子（女）がこれを恨み、池に身を投じた。

三山の性別について、鎌倉時代の万葉学者である仙覚は①の説を、江戸時代後期の国学者である伴信友は②の説を、折口信夫は③の説を採用する。②と③は、江戸時代後期と近代の万葉学説であるため、能〈三山〉の成立に何らかの影響を与えたと考えることはできない。①の仙覚説は、鎌倉時代から江戸時代前期の北村季吟『萬葉拾穂抄』まで、そのまま受け継がれた。いずれにしても萬葉学説と能の男女配置は一致しない。ところが能の詞章においては、一男二女という解釈が一般論として語られている。ワキ扮する良忍上人が、前シテの里の女に、『萬葉集』の大和三山の詳しい謂われについて尋ねる場面である。

ワキ「げにげに萬葉集にいはく。大和の國に三山あり。香久山は夫畝傍耳成山は女なり。これによつて三つに争ふと書けり。この謂れをも委しく御物語候へ

諸説ある三山歌の萬葉學説においても、香具山が男で畝傍山と耳成山が女という説は見当たらない。これは能独自の解釈であり、ちよと仙覺説の男女配置と裏返しになっている。明和二（一七六五）年刊行の『明和改正謡本』^④（以下、明和本と略す）では次のように記されている。

實々萬葉集の長哥に 香山は畝火雄男志と耳梨と あらそひきとよませ給へば 香山は女にて うねび山と耳梨山は男山とおぼえ候 又ことなる昔語の候はゞ委く御物語候へ

明和本では、能〈三山〉の一男二女という男女配置が異説であることを強調している。

江戸時代前期の国学者である契沖の『萬葉代匠記』^⑤においても、三山の性別は仙覺と同じである。ただし契沖は「第一の句、かく山をはと心得へし」と言い、「うねひのを、しき山と、耳成山とか、をのくわれえむとあらそふなり」と解釈し、仙覺の香具山（女）主導の争いとする見方から、一女を「我得む」とする二男の積極的な争い説へと修正をした。さらに契沖は大和三山の妻争いについて、次のような類話を例に挙げている。

さて妻をあらそへることは、此末に見えたる、鬘兒、櫻兒、蘆屋のうなひをとめなどのたくひなり

鬘兒、櫻兒の伝説は『萬葉集』卷十六「有由縁并雜歌」詞書に、菟原処女の伝説は同書卷九の高橋虫麻呂らの長歌に見られる。いずれも一女をめぐる二男ないし三男の妻争い伝説である。能〈三山〉において、耳成山の桂子と畝傍山の桜子との間に香具山の男をめぐる争いが起きた原因について、前シテの里の女がワキ良忍上人に物語る場面がある。

シテ「それはあの香久山に住みける人、畝傍耳成二つの里に。二人の女に契りをこめて。二道かけて通ひしなり

ワキ「さて畝傍山の女の名をば シテ「櫻子と聞えし色好み ワキ「耳成山の女の名をば シテ「桂子といはれし優女な

り ワキ「さて争ひは シテ「花や緑

香具山に住んでいた男が、畝傍山の桜子と耳成山の桂子と契りを結び、両方へ通っていた。桜子は美しい女で花に喩えられ、桂子は優しい女で緑に喩えられる、いずれ劣らぬ美しさであった、と語られる。契沖の『萬葉代匠記』の註釈では、櫻兒と鬘兒の伝説について次のように記される。

此卷櫻兒、鬘兒等おのゝ容儀すくれてかへりて身をそこなへり。かなしきかな。

契沖の『萬葉代匠記』では、二女の器量の良さがかえって仇をなし、悲しい結末を迎えたことが指摘される。ところが『萬葉集』卷十六「有由縁并雑歌」詞書には、櫻兒、鬘兒の器量に関する記述はない。¹⁴⁾

三 能〈三山〉問狂言本の成立時期

江戸時代、能の各流派は、それぞれ流儀の正式演目を整え、書上かきあげという公式文書で幕府に報告していた。書上を調べることによって、その流派の正式演目の加除変遷を知ることができる。寛文、享保、天保の書上を見てみると、能〈三山〉を正式演目としているのは宝生流だけである。それも、享保、天保の書上には記載があるものの、寛文の書上には記載がない。金剛流ではいずれの書上にも記載が見られず、〈三山〉の曲名が謡本に姿を現したのは昭和版からである。昭和版発行に際して、金剛流二十三世宗家の金剛右京によって編入されたものと推定される。観世流でも書上に記載が見られない。

能〈三山〉の間狂言本の詞章は、江戸初期の西村弥三左衛門写あるいは所持とされる『筑波大学本』や、貞享二（一六八五）年の松井兵右衛門写『貞享松井本』、貞享四（一六八七）年の鞍貫勘四郎写『貞享鞍貫本』、『山脇和泉家伝来九冊組問狂言本』（通称「共同社本」）など、古い大藏系問狂言本には記載がない。

能〈三山〉の間狂言本の成立は、江戸時代中期以降と考えられる。

四 能〈三山〉間狂言の詞章比較

『萬葉集』における一女二男の妻争いが、能において一男二女の三角関係に置き換えられている理由を、能の詞章からうかがい知ることができない。二場物の能では前シテの中入後に、アイ所の者がワキ僧の問いに答えて、シテ方扮する役に戻つた物語の補足解説や主題の提示などを行う「間語り」をする。能〈三山〉においても、アイ所の者がワキ良忍上人の問いに答えて、三山の伝説について語る。

能の前場に、アイ所の者がワキ良忍上人に乞われ、大和三山について教える場面がある。アイ所の者による「教工間」で、ワキ良忍上人に三山の位置を示す。東西南北と方向を変えて周囲の名所を教えるうちに、舞台上の四方の風景を説明する。「教え間」は、名所案内とともに、物語の舞台となる場所を設定する。(傍線は私による)。

① 先是より南に見へたるを。天の香久と申候。又西に見へたるをうねひ山と申す。北に見へたるか耳なし山にて候
万葉集にもほめられたる名山にても候間
《和泉流『得平本』》

② まづ是より南に見えたるを天の香久山と申し候。また西に見えたるが耳無山にて候。萬葉集にも褒められたる名山にて候間
《和泉流『狂言集成本』》

③ これより西に見えたるは畝傍山。こなたなるが耳成山。又南に見えたるは香具山と申し候。

《大蔵流『森川杜園本』》

④ 先南に見へたる八天の香具山と申。西なるを畝火山と言ひ。北に見へたるを耳無山と申す。

《鷺流『若林本』》

⑤ 先南に見へたる八天の香具山と申シ。西成るを畝火山と云。北に見へたるを耳無山と申す。

《鷺流『安藤本』》

⑥ 先ツ南二見えたる八天の香具山と申。西なるハ畝火山と言ひ。北に見えたるを耳なし山と申す。

前場において、前シテ里の女がワキ良忍上人に大和三山について次のように語る。

シテ「まづ南に見えたるは香久山。(幕の方に向き)西に見えたるは畝傍山。この耳成までは三つの山。

狂言集成本を除く、三流の間狂言台本および能の詞章は、南が香具山、西が畝傍山、北が耳成山である。狂言集成本だけ「西に見えたるが耳無山」とし、畝傍山については触れない。唐の都城制を模した藤原京は、東に香具山、西に畝傍山、北に耳成山の大和三山に囲まれた地であったことが『萬葉集』巻一「藤原宮御井歌」²²によって知られる。能や間狂言台本の詞章では「南に見えたるは香久山」としているが、実際の地理では、東に香具山、西に畝傍山、北に耳成山、南に吉野山である。また和泉流では大和三山について「万葉集にもほめられたる名山」と語るが、大蔵流と鷺流では語られない。また鷺流の若林本では「最前小原の良恩聖と有りて。当所の三山をお尋ね有りし程に。即懇に教へやり申たるが。」と前置きし、三山の方角について語り始める。若林本のみ、アイがワキと没交渉で、名ノリ座で立つたまま物語をする「立シヤベリ間」で間語りを行う。

前シテの中入後、再びアイ扮する所の者が登場する。ワキ良忍上人に「この三山につき様々子細あるべし。御存じに於ては語つて御聞かせ候へ」と、三山の謂われについて尋ねられ、アイ所の者が返答をする。

①是ハ思ひもよらぬ事を承り候者―我等も委敷ハ存せず候へ共最前より御目にかゝりお尋有を何をも存せぬと申もいゝかに候間あら〜御物語申さうするにて候

《和泉流「得平本」》

②是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も委しくは存せず候へども。最前より御目にかゝり。今更存ぜぬと申すも如何に候間。あら〜御物語申さうするにて候。語まづ。三山と申すは。最前教へ申す如く。香久山畝傍山耳無山。是を三山と申し候。

《和泉流「狂言集成本」》

③狂言「これは思ひよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの所に住居仕り候へども。左様の事委しくは存せず候さり

ながら。凡そ承りたる通り御物語申さうずるにて候。ワキ「近頃にて候。狂言」さる程にこの大和の国に於て。三山と申すは隠れもなき御事にて候。これなるは香具山と申して隠れもなき名山にて候。即ち万葉集にも。春過ぎて夏來にけらし白妙の。衣ほすてふ天の香具山と。かやうに御座候。

《大藏流『森川杜園本』》

④夫に付あの南に見へたるを天の香久山と申子細は。天照太神葛城の天の岩戸に御籠り成されし時。其所が昌共香四方に薫じたるに仍て。天の香具山とハ申す。

《鷺流『若林本』》

⑤【此所セリフ常ノ通り】先南に見へたるを天の香久山と申子細は。天照太神かつらきの天の岩戸に御籠り成されし時。其所が昌共香四方に薫じたるに仍て。天の香具山とハ申す。

《鷺流『安藤本』》

⑥【常ノ答】●先南ニ見へたるを天の香久山と申子細は。天照太神葛城の天の岩戸ニ御籠り被成し時其所より異香四方ニ薫じたるに依て。天の香具山とハ申す。

《鷺流『天田本』》

大藏流と鷺流では、まず初めに香具山が由緒ある山であることを語る。大藏流では、持統天皇が香具山について詠んだ歌を紹介する。鷺流では、天の岩戸隠れの伝承地としての香具山を紹介する。和泉流では、香具山については触れない。アイ所の者は、三山の一男二女の三角関係について語り始める。

①先桂子と申は、心やさしくかたちつくしき遊女にてこさ有けると申候。最前おしへ申たる。耳なし山の麓に住申候又今壹人桜子と申遊女。是はうねび山の麓にすみけるか。其徒かく山の麓に柏手の公成と申御方のこさ候ひしか。彼桜子に心をうつしみ、なし山に通ひ給ひ御契りあさからさりしに浮世のならひとハ申ながら彼の公成の脚心のあたるにや。

《和泉流『得平本』》

②いにしへこの耳無山の麓に。桂子と申して優にやさしき遊女のありしに。その頃香久山の邊りに。柏手の公成と申す御方の御座候ひしが。かの桂子に心をかけ。耳無山に通ひ浅からざる仲となり給ひたると申す。又同じ頃畝傍山の麓に。櫻子と申してその貌世に越え。いとやさしき女のありしを。

《和泉流『狂言集成本』》

③古この山に。公成と申す人濟み給ひ。又畝傍山に櫻子申す女の住み給ひ。耳成山に桂子と申す女の御座候。公成始めの程は桂子と御契り淺からず御座候が。
《大藏流『森川杜園本』》

④然れば古へ香久山の禁に。柏手の公成と云人ありて。色好成る御方にてましますが。此北に見へたる耳なし山にハ桂子と申遊女あり。又畝火山に桜子と申女の有けるが。彼公成は桂子に心を掛。誠に妹背の契淺からさりしに。

《鷺流『若林本』》

⑤然れば古へ香久山の禁に。柏手の公成と云人有りて。色好成る御方にて御座すが。北に見へたる耳無山にハ桂子と申遊女あり。又畝火山に桜子と申女の有けるに。

《鷺流『安藤本』》

⑥然れば古へ香久山の麓ニ。柏手の公成と言人有りて。色好なる御方にて御坐有しが。北二見えたる耳なし山ニハ。桂子と申遊女有り。又畝火山ニ桜子と申女有けるに。彼公成ハ桂子に思ひを掛け。誠ニ妹背の契り淺からさりしに。

《鷺流『天田本』》

和泉流ではまず初めに桂子について紹介をする。「遊女」は「優女」の当て字で、桂子が心も容貌も美しく優しい女であったことが語られる。また「間語り」において物語の舞台となる場所を設定することがある。得平本では「いにしへこの耳無山の麓に。桂子と申して優にやさしき遊女のありしに」とあることから、物語の舞台が耳成山であることを設定する。大藏流では「古この山に。公成と申す人濟み給ひ」とあることから、物語の舞台は公成の住んでいた香具山であることを設定する。鷺流ではまず初めに、香具山の麓に住む「柏手の公成」について紹介をする。「柏手」とは、六世紀から七世紀に伴造として活躍した豪族「膳かして」氏のことと考えられる。香具山の山麓東北部に膳夫町かしてが現存する。

アイ所の者は、香久山の麓に住む公成が、耳成山の桂子と畝傍山の桜子に通っていたが、いつしか桜子へ気持ち傾き、これを恨んだ桂子が耳成の池に身を投じたことを物語る。

①其時桂子思ふやう。昔よりうつりかはるは世のならひ千年万年契れともわかる、中も有あからさまと八思へともな

からへはづる事も有世に定メなき夫ウツトの心。誰うらむへきやうも無しとかく此世に生てもなにかせん。思ひ切たる心故是成池水に身をなげむなく成申されて候あわれと申も中くおろか成ル事にてこさ候。《和泉流『得平本』》
②其時桂子思ふ様。昔より移り變るは世の習ひ。たとひ千年ちとせを契れども。別る、仲もあり。定めなきは夫の心。誰怨むべき様もなし。此世にありても其の甲斐なしと思ひ。是なる池水に身を投げ空しくなり申して候。其の様體を公成聞附け池の邊に來り。敢へなき姿を見一首の歌に。耳なしの。池し恨みて吾妹子わぢもこが。きつ、かくれば水はかれなんと。詠み給ひたると申し候。誠に。哀れなる御事にて御座ありたるげに候。《和泉流『狂言集成本』》

③女性のはかなさは。捨てられし事を深く嘆き。命あつても詮なしとて。身を投げ空しくなり給ふ。公成聞き給ひ。大に驚き。わが心故に桂子失ひたる事是非なしとて。一首の歌に。耳なしの池も恨めし吾妹子が。きつ、なれにし水はかれなんと。かやうに詠み給ひ。それより櫻子の方へも御通ひなく。愛念を止め給ふと承り候。

④桂子此由を聞。此世にありても何かせんと思ひ。耳なし山の禁なる池水に身を投空しく成るを。亦柏手の公成是を聞付給ひ。我をうらみ相果たる事不便なりと思召。夫より桜子をふつと思ひ切り給ふ。《鷺流『若林本』》

⑤桂子ハ此由を聞。此世に有りても何かせんと思ひ。耳無山の禁なる。池水に身を投空しく成るを。亦柏手の公成是を聞付給ひ。我を恨み相果たる事不便なりと思召。夫より桜子をふつとおもひ切給ひたる由承る。《鷺流『安藤本』》

⑥桂子ハ此由を聞。世ニありても何かせんと思ひ。耳なし山の麓なる池水ニ。身を投空敷成たるを。柏手の公成是を聞給ひ。我を恨み相はてたる事。不便也と思召。夫より桜子をふつと思ひ切給ひたる由承る。《鷺流『天田本』》

桜子と桂子の名は、『萬葉集』卷十六所収の「有由縁并雜歌」の二男が一女、櫻兒を争い女が首をくくる伝説と、三男が一女、鬘兒を争い女が身を投げる伝説から引用している。三流ともに、公成の心が桜子へと傾いた結果、桂子が耳成山の

池に身を投げたことを物語る。和泉流では「昔よりうつりかはるは世のならひ千年万年契れともわかる、中も有あからさまとハ思へともなからへはづる事も有世に定メなき夫の心」と、男の心の移ろいややすさを物語る。一方、典拠となる『萬葉集』卷十六「有由縁并雜歌」詞書の櫻兒と鬘兒の伝説は、一女を得ようとする男の和らげにくく堅い心について物語る。狂言集成本や森川杜園本では萬葉集の和歌を、公成が桂子の死を悼み詠んだ歌として紹介する。大藏流と鬘流では桂子入水以来、公成が桜子の元へ通うことがなくなつたことを物語る。和泉流ではこの後日談は語られず、得平本では桂子の入水を「あわれと申も中々おろか成ル事にてござ候」と物語る。

和泉流の狂言集成本は間語りの後半に、鎌倉時代の萬葉学者の仙覚の説を引用している（《》は私による）。

	仙覚『萬葉集註釋』卷一 和泉流『狂言集成本』
① ムカシハ山川モ夫婦ノ契ラムスヒケリ。	《④参照》 又三山の事を萬葉集に載せられたるは。
② シカルニカク山ハ、女山也。畝火山ト、耳梨山トハ男山也。	香久山は女山。畝傍山耳無山は男とあり。
③ シカルニミ、ナシヤマ、ハシメニカクヤマヲケシヤウスルニ、ナニトナクウケヒクケシキナリケリ。	昔は山川も夫婦の契を結びしにや。《↓①》 耳無山初めに香久山を懸想じければ、何となくうけひく氣色なりしを。
④ ソノ、チニ、ウネヒノ山、又カク山ヲケシケウスルニ、ウネヒノ山ハスカタモヲ、シク、ヨカリケレハ、コレニ心ウツリニケリ。	又畝傍山も香久山に思ひをかけしに。畝傍山は姿も雄々しく良かりければ。香久山これに心移りしにより。
⑤ ヲ、シキトイフハ、ケタカクヨキ也。サテミ、ナシヤマ、サキノヤクソクニマカセテ、アハントスルニ、カクヤマウケヒカス。	《記載無し》
⑥ ウネヒノ山コレヲキ、テ、トモニタ、カフ。コレヲミツ山ノタ、カヒト云也。	互ひに争ひ戦ひしを。三山の戦とは申すげに候。
⑦ イマコノミウタニ、カノ本縁ヲヨマセ給トシテ、	されば帝の御歌に。

<p>⑩ カミヨヨリ、カ、ルニアラシ、イニシヘモ、シカニアリコソ、ウツセ ミモ、ツマヲアヒウツラシキトハ、</p>	<p>香久山は。畝傍<small>み</small>雄々しと。耳無しと。相争<small>ひ</small>き神代より。斯かるにあ らしいにしへも。然<small>しか</small>にあれこそ虚<small>うつ</small>蟬も。つまをあひうつらしきと。</p>
<p>⑪ 令詠給也。</p>	<p>詠ませ給ひたると承り及びて候。</p>

香具山を女に、畝傍山と耳成山を男に見立てる仙覚の説を、他の間狂言台本では引用しない。仙覚の説を引用すると、前場でワキ良忍上人が、前シテ里の女に、三山の詳しい謂われについて尋ねる能の詞章と矛盾が生じるためである。

ワキ「げにげに萬葉集にいはく。大和の國に三山あり。香久山は夫畝傍耳成山は女なり。」

能の詞章と通常の間狂言台本は、香具山を男に、畝傍山と耳成山を女に見立て、それが一般的な説であるかのように語る。一方、狂言集成本は無理なこじつけをせず、仙覚の説を紹介する。狂言集成本では『萬葉集』の内容と本曲独特の物語の展開との相違をあえて提示するのである。問語りの役割は、シテ方扮する役にあつたる物語の補足解説や主題の提示などを行うことである。狂言集成本は、相違をあえて補足解説することにより、能〈三山〉の独特の物語展開を観客に説得する役割を果たしていたと考えられる。

能〈三山〉では、ワキを類型的な諸国一見の僧とはせず、融通念仏宗の宗祖である良忍上人とする。アイ所の者は、桂子の霊が、ワキ良忍上人の前に姿を現した理由について推量し、桂子の跡を弔うように促す。

① 某すいりやう仕るに彼の桂子ハもふ執深き女なれハ此度名帳ナヂヤウに付き念佛の効力を受佛果に至らん為ゆう灵是迄現れ
たると存候間修行の道ハ御いそき成共暫御逗留有て桂子の跡を御弔ひいつ方へも御通あれかしと存候

《和泉流『得平本』》

② 某推量仕るに。かの桂子は妄執深き女なれば。此度名帳につき。念佛の効力を受け。佛果に至らん為。怨霊これ迄
現れたると存じ候間。修行の道は御急ぎなれども。暫く御逗留あつて。桂子の跡を弔ひ。何方へも御通りあれかし

と存じ候。

《和泉流『狂言集成本』》

③さては身を投げ給ひし桂子の幽霊現れ出で。御詞を交はし給ふと存じ候間。桂子の御跡を御弔ひあれかしと存じ候

《大蔵流『森川杜園本』》

④誠に昔語りとは申ながら。桂子の心中余りに痛敷事なれば。彼御聖に此由を申。融通念仏を以御弔ひ成さる、様に。申上べきと存ずる間。此辺の人々ハ皆々。其分心得候へ

《鷺流『若林本』》

⑤扱ハお僧の御心中貴きにより。古への桂子の亡魂顕れ出。三ツ山の子細を語り申されたと推量致す。誠にむかし語りとは申ながら。余りに桂子の心中痛敷事なれば。暫く是に御逗留成され。迎の御結縁に融通念仏を以て。彼跡を御弔ひ成され。其後何国へも御通りあれかしと存ずる

《鷺流『安藤本』》

⑥扱ハお僧の御心中貴き二より。古への桂子の亡魂顕れ出。三山の子細を語り申されたと推量致す。誠にむかし語りとハ乍申。余りに桂子の心中痛敷事なれば。暫く是に御逗留被成。迎もの御結縁に融通念仏を以て。彼跡を御とふらひなされ。其後いづくへも御通りあれかしとぞんずる

《鷺流『天田本』》

和泉流では、桂子は成仏を妨げる執念が深いことを物語り、桂子の霊が姿を現した理由について、名帳に記名してもらい、念仏の効力によって成仏を果たそうとしたためだと推量し、しばらく逗留して跡を弔うよう促す。大蔵流では、池に身を投げた桂子の霊が現れて言葉を交わしたのだと推量し、跡を弔うように促す。鷺流の若林本は、ワキ良忍上人にこの桂子の悲話を語り、融通念仏で跡を弔ってもらおうと言、「此辺の人々ハ皆々。其分心得候へ」と周囲へ呼び掛けをする。若林本のみ、アイがワキと没交渉で物語をする「立シャベリ間」をし、今までの間語りは、アイ所の者の独り言とする。鷺流の安藤本と天田本は、ワキ良忍上人の心中が貴いため桂子の霊が現れたのだと推量し、しばらく逗留して融通念仏によつて跡を弔うよう促す。この能において良忍上人を出したのは、融通念仏宗の「念仏はすべてのものとけあう」とする教義、自己の念仏と他人の念仏が融通しあつて、一人の念仏が万人を往生させると説く教えが必要であつたからだ。

アイの退場後、後場において上人が桂子の跡を吊っていると、憑き崇っている桂子の恨みを払って欲しいと、ツレ桜子の霊が現れる。そこへ後シテ桂子の霊も現れ、激しい後妻打ちを展開するが、結末において、相争った桂子と桜子兩人諸共に成仏を果たすのである。

おわりに

能〈三山〉は創作の発想は、大和三山の妻争い説話にある。『萬葉集』卷一の三山歌と、同書卷十六所収の「有由縁并雜歌」の櫻兒、鬘兒の伝説とを織り交ぜ創作されているのだが、二男又は三男が一女を争うのを、一男を二女が争うものを作り替えている。能〈三山〉は『萬葉集』に依拠していることは間違いない。しかしこれを単純な翻案として片付けることはできない。これを看過することのできない理由は、能の詞章が、典拠となる『萬葉集』の内容を作り替えてしまっているためである。

能〈三山〉の典拠となる『萬葉集』	
香具山を女に、畝傍山と耳成山を男に見立てる。	
東に香具山、西に畝傍山、北に耳成山、南に吉野山。	
鬘兒が耳成の池に身を投げたのは、自分に求婚する三人の男の心の、石のよう固く和らげ難さが原因。	
能〈三山〉	
香具山を男に、畝傍山と耳成山を女に見立てる。	
南に香具山、西に畝傍山、北に耳成山。	
桂子が耳成の池に身を投げたのは、二股を掛けた一人の男の心の、移ろいやすさが原因。	

間語りの役割として、能の筋と本説や典拠との間を取り持つという役割がある。すなわち、相違のある、能〈三山〉の筋と、典拠となる『萬葉集』の原歌と詞書とを、間語りによってつなげなくてはならないのである。狂言集成本以外の間

狂言本は、能〈三山〉の詞章に従い、香具山を男に、畝傍山と耳成山を女に見立て、それが一般的な説であるかのように語る。一方、狂言集成本は無理なこじつけをせず、仙覚の萬葉学説を紹介することによって、能独自の設定との相違を、観客に説得したものと考えられる。

間狂言は能の一部であることから、おおよその内容は能作者の指定を受けたと考えられる。それでも能〈三山〉間狂言本の本文異同が激しいのは、流派意識の高揚などにより、次々と各家で台本が筆録されるようになったことや、能の筋と本説や典拠との間を取り持つ間語りについて、独自に創意を加えたりするようになったためだと考えられる。

注

(1) 吉田兼将編。大永四(一五二四)年成立の作者付。三五〇番の曲名を作者別に列記している。観世長俊や父の信光、同世代の金春禪鳳らに関しては有力な資料で、同時代の作者付である『自家伝抄』と比べても所説に客観性がある。一方で、作者不明の優れた曲目についてはほとんど全てを世阿弥の作とし、同時代以外の曲目の記述に不正確な面もある。

(2) 明和二年(一七六五年)に上梓の版本。十五世観世大夫・観世元章が著した作者付。同年、元章はそれまでの謡本の詞章を大幅に改訂した『明和改正謡本』を編纂したが、本著はその目録に作者名を注記したもの。元章は、先行の作者付の信頼度については深く検討せずにそのまま採り入れたため、誤りが非常に多い。

(3) 金剛流では、〈三山〉の曲名が謡本に姿を現したのは昭和版からである。昭和版発行に際して、金剛流二十三世宗家の金剛右京によって編入されたものと推定される。観世流では、明和二(一七六五)年刊行の『明和改正謡本』において現行曲として組み入れられたが、昭和六十年に復曲上演されるまで廃曲扱いとなっていた。

(4) 中大兄近江宮御宇天皇三山歌一首・巻第一・国歌大観番号13(小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『萬葉集』① 新編日本古典文学全集6)小学館、一九九四年五月)。読み下し文は同書による。

(5) 「有由縁并雑歌・巻第十六・国歌大観番号3786・3787」の詞書き(小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『萬葉集』④ 新編日本古典文学全集9)小学館、一九九六年八月)。

(6) 「有由縁并雑歌・卷第十六・国歌大観番号3788・3789・3790」の詞書（小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『萬葉集』④ 新編日本古典文学全集9』小学館、一九九六年八月）。

(7) 注4。

(8) 佐成謙太郎著『謡曲大観』第五卷、明治書院、昭和五十七年八月。本稿執筆にあたり謡曲本文は観世流現行本を収める『謡曲大観』を用いる。

(9) 注8。

(10) 佐佐木信綱編『萬葉集叢書 第八輯』古今書院、大正十五年七月。

(11) 諸解釈については、澤瀉久孝氏の『萬葉集注釋 卷一』（中央公論社、昭和三十一年十一月）による。

(12) 十五世観世大夫元章により明和二（一七六五）年に、それまでの観世流謡本の詞章を大幅に改訂した『明和改正謡本（以下明和本）』が刊行された。極端な改訂は不評で、元章の没後はずくに旧に復した。明和本の制作を命じたのは、徳川御三卿の一つ、田安家の始祖である田安宗武であることが分かっている。明和本は、田安宗武や賀茂真淵らの協力によって、字句の改訂などが行われているため、国学の影響が色濃く反映されている。

(13) 久松潜一校訂『契沖全集』第一巻、岩波書店、昭和四十八年一月。

(14) 「有由縁并雑歌・卷第十六・国歌大観番号3786・3787」の詞書は「昔娘子あり、字を桜児といふ。ここに二の壮士あり、共にこの娘を誂ひて、生を捐てて捨競ひ、死を貪りて相敵る。ここに娘子歎きて曰く、『古より今までに、未だ見ず、一の女の身の二つの門に往適くといふことを。方今壮士の意、和平し難きことあり。如かじ、妾が死にて相害すこと永く息まむには』といふ。すなはち林の中に尋ね入り、樹に懸りて経き死ぬ。その両の壮士、哀慟に敢へず、血の泣襟に漣れぬ。各心緒を陳べて作る歌二首」と、器量に関する記述はない。「有由縁并雑歌・卷第十六・国歌大観番号3788・3789・3790」の詞書は「或の曰く、昔三の男あり、同じく一の女を婿ふ。娘子嘆息ひて曰く、『一の女の身の、滅易きこと露の如く、三の雄の志の、平し難きこと石の如し』といふ。遂に乃ち池の上に彷徨み、水底に沈み没りぬ。ここにその壮士等、哀類の至りに勝へず、各所心を陳べて作る歌三首 娘子は字を覺児といふ」と、器量に関する記述はない。

(15) アイがワキに名所を教えることを「教工問」という。能（三山）では一曲の中に、「教工問」と「問語り（語り問）」の二種類

の間狂言が演じられる。

(16) 「山脇得平本間之本」、通称「得平本」。江戸末期写。狂言共同社、佐藤友彦氏蔵。山脇藤左衛門家九世の山脇得平の手による。間狂言本詞章比較の底本として用いた。原本による。

(17) 「三宅庄一手沢本」、通称「狂言集成本」。江戸末期写。「翻刻」野々村戒三、安藤常次郎著「狂言集成」(春陽堂、昭和六年七月)。

(18) 「森川杜園旧蔵本」、通称「森川杜園本」。推定寛政頃写。「翻刻」佐成謙太郎著『謡曲大観』第四卷(明治書院、昭和六年二月)。

(19) 「真野町若林義太郎氏所蔵間狂言本」、通称「若林本」。上下二分冊で、表紙にはそれぞれ「鷺流間狂言上」、「鷺流間狂言下」の表題が付されている。二・三二曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。

(20) 「両津市安藤春雄氏所蔵間狂言本」、通称「安藤本」。安藤家所蔵の間狂言本は「問とワキ」、「問のみ」、「ワキのみ」の三種類がある。これらの間狂言本には表題が付されていない。本文最終丁に「明治三六年文月これを写す 持主恵比須町 安藤幸彦」とある。二〇一曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。

(21) 「両津市天田保氏所蔵間狂言本」、通称「天田本」。和綴袋とし一冊本で、表題は付されていない。筆者は三河湖翁で「明治四一年五月、七五歳の時に天田狂楽の乞いにより書写」とある。一八五曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。

(22) 藤原宮御井歌・巻第一・国歌大観番号52(小島憲之、木下正俊、東野治之校注・訳『萬葉集』① 新編日本古典文学全集6)小字館、一九九四年五月)。藤原京に関わる祝福の歌で、香具山は「日の経の大きな御門」、畝傍山は「日の緯の大きな御門」、耳梨山は「背面の大きな御門」、吉野山は「影面の大きな御門」と歌い、香具山は東の太陽の昇る太陽線を意味した。

(23) 森川杜園本において「即ち万葉集にも」とあるが、アイが引用する歌は新古今和歌集に収められた際に改作された歌である。萬葉集では「衣ほしたり」となっているが、新古今和歌集では「衣ほすてふ」という伝聞の形を取っている。

(24) 注14参照。

(25) 国学の影響を強く受けた明和本の詞章では、ワキ良忍上人が前シテ里の女に「又ことなる昔語の候は、委く御物語候へ」と尋

ね、能〈三山〉の一男二女という男女配置が異説であることを強調する。それまでの観世流謡本の詞章を大幅に改訂した明和本は不評で、改訂者の元章没後はすぐに旧に復した。そのため明和本以外の謡本では、『萬葉集』の内容と本曲独特の物語の展開との相違をあえて提示するようなことはない。

(26) 「ゆうずうねんぶつしゅう【融通念仏宗】」の項、三三六頁（日本国語大辞典第二版編集委員会、小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典 第二版』第十三巻、小学館、二〇〇二年一月）。

（本学非常勤講師）

能〈三山〉間狂言本の記事別異同対照表

（一）書誌及び台本の分類

現在入手できる間狂言本の記事別異同対照表を、間狂言で語られる内容の時代や流儀による変遷を把握することを目的として作成した。比較表で用いた台本は次の通りである。簡単な解説とともに列挙する。《 》内は本文で用いた略称である。

和泉流

①山脇得平本間之本《得平本》江戸末期写。狂言共同社、佐藤友彦氏蔵。山脇藤左衛門家九世の山脇得平の手による。間狂言本詞章比較の底本として用いた。原本による。

②三宅庄一手沢本《狂言集成本》江戸末期写。「翻刻」野々村戒三、安藤常次郎著『狂言集成』（春陽堂、昭和六年七月）。大蔵流

③森川杜園旧蔵本《森川杜園本》推定寛政頃写。「翻刻」佐成謙太郎著『謡曲大観』第四卷（明治書院、昭和六年二月）。鷺流

④真野町若林義太郎氏所蔵間狂言本《若林木》上下二分冊で、表紙にはそれぞれ「鷺流間狂言上」、「鷺流間狂言下」の表題が付されている。二二三曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』（真野町教育委員会、平成十

年二月)。

- ⑤両津市安藤春雄氏所蔵間狂言本《安藤本》安藤家所蔵の間狂言本は「間とワキ」、「間のみ」、「ワキのみ」の三種類がある。これらの間狂言本には表題が付されていない。本文最終丁に「明治三十六年文月これを写す 持主恵比須町 安藤幸彦」とある。二〇一曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。
- ⑥両津市天田保氏所蔵間狂言本《天田本》和綴袋とし一冊本で、表題は付されていない。筆者は三河湖翁で「明治四一年五月、七五歳の時に天田狂楽の乞いにより書写」とある。一八五曲を所収。「翻刻」佐渡鷺流狂言研究会編集『佐渡鷺流間狂言』(真野町教育委員会、平成十年二月)。

(二) 凡例

- 一、間狂言本の記事別異同対照表は、『山協得平本間之本』を底本とするものである。
- 一、対照表を作成するにあたり、通読の便宜や印刷上の制約を考慮して、次のような処置を施した。
- 1、文字遣いは底本通りとし、混用されている片仮名もそのままとする。
 - 2、特殊な合字・連字体は通行字体に改める。
 - 3、ト書き等は割注で記されることもあるが、すべて一行書きとする。
 - 4、セリフが行間に補って書き入れている場合、これを本文の該当箇所に入れて「」で括って示した。ただし、それがセリフ以外の補足的な記述の場合は「」を用いて示した。
- 一、読解の困難な文字は□(伏せ字)とした。

問狂言本名		和泉流		大藏流		鸛流	
段の構成	①得平本〈三山〉	②狂言集成本〈三山〉	③森川杜園本〈三山〉	④若林本〈三山〉	⑤安藤本「同語」	⑥天田本〈三山〉	
アイの登場	三山	三山 アヒ 里人	ワキ「所の人の渡り候か	腰明 長上下 少 サ刀扇持	同語 四十三	三山 腰明、長上下、小 サ刀、扇持	
1―①		脇呼出す。	ワキ「所の者、着附鬘斗目・長上下・腰帶・扇・小刀の装束にて一の松に立ち、	【初同脇ノ跡ヨリ出常座二居ル脇ヨリ所の渡候ト掛ル】		【初同脇ノ跡ヨリ出常座二居ル脇ヨリ所の渡候ト掛ル】	
1―②			狂言「所の者とお尋ねは。いかやうなる御用にて候ぞ	●誰にて渡候ぞ	●誰にて渡り候ぞ	●誰にて渡候ぞ	
2―① アイとワキの応対	所の者とお尋はいかやう成る御事にて候ぞ	＼所の者とお尋ねは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。	ワキ「これは大原の良忍と申す聖にて候が。融通念仏を弘め。これまで参り候。この所は三山と申して名所の由承り及びて候。教へて給はり候へ			（是は小原の良忍ト申聖ニテ候ガ融通念佛ヲ弘メ是迄参りて候此所ハ三山ト申テ名所ノヨシ承リ及テ候教テ玉ハリ候へ）	
2―②		シカ／＼。					
2―③	三ツ山と申ハ壹ツの山のやうに思召れうするか。左様にてハこそなく候	＼三山と申せば。一ツ山の様に思召されうずるか。左様にては御座なく候。	狂言「さん候	●参ん候和州三山と申ハ。	●参ん候和州三山と申ハ。	●参ん候和州三山と申ハ。	

2—④	先是より南に見へたるを。天の香久と申候。又西に見へたるをうねひ山と申す。北に見へたるか耳なし山にて候	まづ是より南に見えたるを天の香久山と申し候。また西に見えたるが耳無山にて候。	これより西に見えたるは畝傍山。こなたなるが耳成山。又南に見えたるは香具山と申し候。	先南に見へたるハ天の香具山と申。	先南に見へたるハ天の香具山と申シ。西成るを畝火山と云。北に見へたるを耳無山と申ス。	先ツ南二見えたるハ天の香具山と申。西なるハ畝火山と言ひ。北に見えたるを耳なし山と申ス。
2—⑤	万葉集にもほめられたる名山にて候間	萬葉集にも褒められたる名山にて候間。		初めたる御方ならば心静に御覽候へ	初めたる御方ならば心静に御覽候へ	初めたる御方ならば。心静に御覽候へ
2—⑥	心静に御ねめ有するにて候	心のどかに御眺めらうずるにて候。	心静かに御一見候へ	初めたる御方ならば心静に御覽候へ	初めたる御方ならば心静に御覽候へ	初めたる御方ならば。心静に御覽候へ
2—⑦		シカく。	ワキ一懇に御教へ祝着申して候。さあらば立ち越え心静かに一見申さうずるにて候			〔脇 念頃ニ御教へ祝着申て候去らバ立越心静に一見申うずるにて候〕
2—⑧	重て御用もあらハ承り候	重ねて御用もあらば承り候べし。	狂言一御用の事候はば重ねて仰せ候へ	●御用の事あらハ承ふずる	●御用の事あらハ承ふずる	●御用の事あらハ承ハふずる
2—⑨		シカく。	ワキ一頼み候べし			〔脇 頼ミ候べし〕
2—⑩		後。心得申して候。	狂言一心得申して候といひて狂言は狂言座にくつろぎ、ワキは脇座に行きかゝる。	●心得申候	●心得申候	
2—⑪						
3—①	アイの仕事・シテにまつわる物語	中入過ぎて。	狂言立ち名乗座に出て、	【中入ニ立如常】		【中入ニ立常ノ通】

3—②	<p>最前修行者の。三山をお尋ねにて候かい。また爰許に御入候は、。参り十念をも請申さはやと存るや先のお僧の未夕是にこそ候よ</p>	<p>最前修行者の三山をお尋ねにて候が。未だ爰許に御入り候は、。某十念をも請け申さばやと存ずる。先のお僧の未だ是に御座候よ。</p>	<p>狂言「最前の御僧の。三山を御尋ね候程に。教へ申し候。未だあれに御座候か参つて見申さばやと存ずる。(ワキに向ひ) 御僧は未だこれに御座候か</p>	<p>●最前小原の良思 聖と有りて。当所の三山をお尋ね有りし程に。即懇に教へやり申たるが。</p>	<p>●最前小原の良思 聖とありて。当所の三山を尋給ふ程に。某の念頃に教やり申たるが。いまだあれに御座るか。但シ何方へも御通りありたるか参りて見申さうずる。いやいまだ是に御座候よ</p>	<p>●最前小原の良思 聖と有つて。当所の三山をお尋ね有りし程に。即懇に教へやり申たるが。 未ダあれ二御坐るか但し何方へも御通りありたるか。参りて見申うずる。いやいまだ是二御坐候よ</p>
3—③	シカく	シカく。	ワキ「未だ逗留申して候。まづ近う御入り候へ。尋ねたき事の候		●中々最前の者に候	《脇》未夕逗留申て候先ツ近う御入候へ尋申度事の候
3—④	我等も十念を受申度望にて是迄参して候	我等も十念請け申したき望みにて是迄参りて候。				
3—⑤	シカく 心得申て候 扱お尋	シカく。 心得申して候。扱お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。	狂言畏まつて候。(真中に出で下に居て)さて御尋ねされたきとは。いかやうなる御事にて候ぞ		●心得申候 ●扱お尋ありたきとハいか様なる御事にて候ぞ	●心得申候。偕御尋有度とハ如何様成御事にて候ぞ
3—⑥	心得申て候 扱お尋	心得申して候。扱お尋ねありたきとは。如何やうなる御事にて御座候ぞ。	狂言畏まつて候。(真中に出で下に居て)さて御尋ねされたきとは。いかやうなる御事にて候ぞ		●心得申候 ●扱お尋ありたきとハいか様なる御事にて候ぞ	●心得申候。偕御尋有度とハ如何様成御事にて候ぞ

3 ⑦	シカく	シカく。	ワキ「思ひもよらぬ申し事にて候へども。この三山につき様々子細あるべし。御存じにて於ては語つて御聞かせ候へ			〔脇〕 思ひも寄らぬ申事にて候へ共此三山ニ付て様々子細有べし御存ニ於ハ語て御聞させ候へ
3 ⑧	是ハ思ひもよらぬ事を承り候者―我等も委敷ハ存せず候へ共最前より御目にか、りお尋有を何をも存せぬと申もい、かに候間あらく御物語申さうするにて候	是は存じも寄らぬ事を承り候ものかな。我等も委しくは存せず候へども。最前より御目にか、り。今更存せぬと申すも如何に候間。あらく御物語申さうするにて候。	狂言「これは思ひよらぬ事を承り候ものかな。我等もこの所に住居仕り候へども。左様の事委しくは存せず候さりながら。凡そ承りたる通り御物語申さうするにて候		【此所セリフ常ノ通り】	【常ノ答】
3 ⑨			ワキ「近頃にて候狂言―さる程にこの大和の国に於て。三山と申すは隠れもなき御事にて候。			
3 ⑩ (三山について)		語まつ。三山と申すは。最前教へ申す如く。香久山畝傍山耳無山。是を三山と申し候。				

<p>3—13</p>	<p>3—12 (桂子、桜子、公成のこと)</p>	<p>3—11 (香久山について)</p>
<p>又今壹人桜子と申遊女。是はうねび山の麓にすみけるか</p>	<p>先桂子と申は心やさしうかたちうつくしき遊女にてござ有けると申候。最前おしへ申たる。耳なし山の麓に住申候</p>	<p>これなるは香具山と申して隠れもなき名山にて候。即ち万葉集にも。春過ぎて夏来にけらし白妙の。衣ほすてふ天の香具山と。かやうに御座候。</p>
	<p>いにしへこの耳無山の麓に。桂子と申して優にやさしき遊女のありしに。</p>	<p>夫に付あの南に見へたるを天の香久山と申子細は。</p>
		<p>先南に見へたるを天の香久山と申子細は。</p>
		<p>●先南二見へたるを天の香久山と申子細は。</p>
	<p>天の香具山とハ申す。</p>	<p>天照大神葛城の天の岩戸ニ御籠り成し時其所より異香四方ニ薫したるに依て。天の香具山とハ申。</p>
		<p>天照大神葛城の天の岩戸ニ御籠り成し時其所より異香四方ニ薫したるに依て。天の香具山とハ申。</p>

<p>3—17 （公成の心変わり と桂子の入水）</p>	<p>3—16</p>	<p>3—15</p>	<p>3—14</p>
<p>うねひ山に有桜子を ひとめ見しより心う つり。又引かへてう ねひ山に通ひ夫より して桂子へハおと つれもなくすさみ参 らせ候程に</p>	<p>かのか公成心移り。又 引替へて畝傍山に通 ひ。それよりして桂 子は音信もなく。す さみ参らせし程に。</p>	<p>又同じ頃畝傍山の麓 に。櫻子と申してそ の貌世に越え。いと やさしき女のありし を。</p>	<p>其従かぐ山の麓に 柏手の公成と申御方 のこさ候ひしか。 その頃香久山の邊り に。柏手の公成と申 す御方の御座候ひし が。 かの桂子に心をか け。耳無山に通ひ淺 からざる仲となり給 ひたると申す。</p>
<p>何とか思し召しけん。 畝傍山の方へ御 出であり。耳成山へは 御音づれもなく候間。</p>	<p>耳成山に桂子と申す女 の御座候。公成始めの 程は桂子と御契り淺か らず御座候が。</p>	<p>又畝傍山に櫻子申す女 の住み給ひ。</p>	<p>古この山に。公成と申 す人濟み給ひ。</p>
<p>世の中の人の心ハ 移り替る習なれ バ。又桜子に心を うつし桂子の方へ ハ御通ひもなきに より。</p>	<p>彼公成は桂子に心 を掛。誠に妹背の 契浅からざりし に。</p>	<p>然れバ古へ香久山 の禁に。柏手の公 成と云人ありて。 色好成る御方にて ましますが。 此北に見へたる耳 なし山にハ桂子と 申遊女あり。又畝 火山に桜子と申女 の有けるが。</p>	<p>然れバ古へ香久山 の禁に。柏手の公 成と云人有りて。 色好成る御方にて 御座すが。 北に見へたる耳無 山にハ桂子と申遊 女あり。又畝火山 に桜子と申女の有 けるに。</p>
<p>世の中の人の心ハ 移り替る習ひなれ バ。又桜子ニ心を 移し。桂子の方へ ハ御通ひもなきに より。</p>	<p>彼公成ハ桂子に思 ひを掛ケ。誠ニ妹 背の契り浅からざ りに。</p>	<p>然ハ古へ香久山の 麓ニ。柏手の公成 と云人有りて。色 好なる御方にて御 坐有しが。 北ニ見えたる耳な し山ニハ。桂子と 申遊女有り。又畝 火山ニ桜子と申女 有けるに。</p>	<p>然ハ古へ香久山の 麓ニ。柏手の公成 と云人有りて。色 好なる御方にて御 坐有しが。 北ニ見えたる耳な し山ニハ。桂子と 申遊女有り。又畝 火山ニ桜子と申女 有けるに。</p>

<p>3—18 〔萬葉集〕卷十 六「有由縁并雜歌」 の詞書の裏返し ①</p>	<p>其時桂子思ふやう。 昔よりうつりかはる は世のならひ千年万 年契れともわかる、 中も有あからさまと ハ思へともなからへ はづる事も有世に定 メなき夫の心。誰 うらむへきやうも無 しとかく此世に生て もなにかせん。思ひ 切たる心故</p>	<p>其時桂子思ふ様。昔 より移り變るは世の 習ひ。たとひ千年を 契れども。別る、仲 もあり。定めなきは 夫の心。誰怨むべき 様もなし。此世にあ りても其の甲斐なし と思ひ。</p>	<p>女性のはかなさは。捨 てられし事を深く嘆 き。命あつても詮なし とて。</p>	<p>桂子此由を聞。此 世にありても何か せんと思ひ。</p>	<p>桂子ハ此由を聞。 此世に有りても何 かせんと思ひ。</p>	<p>桂子ハ此由を聞。 世ニありても何か せんと思ひ。</p>
<p>3—19 〔萬葉集〕卷十 六「有由縁并雜歌」 の詞書の裏返し ②</p>	<p>是成池水に身をなげ むなしく成申されて 候あわれと申も 中／＼おろか成ル事 にてこさ候</p>	<p>是なる池水に身を投 げ空しくなり申して 候。</p>	<p>身を投げ空しくなり給 ふ。</p>	<p>耳なし山の桮なる 池水に身を投空し く成るを。</p>	<p>耳無山の桮なる。 池水に身を投空し く成るを。</p>	<p>耳なし山の麓なる 池水ニ。身を投空 敷成たるを。</p>
<p>3—20 〔公成の悲嘆〕</p>	<p>其の様體を公成開附 け池の邊に來り。敢 へなき姿を見一首の 歌に。</p>	<p>公成聞き給ひ。大に驚 き。わが心故に桂子失 ひたる事は非なしと て。一首の歌に。</p>	<p>亦柏手の公成是を 聞付給ひ。我をう らみ相果たる事不 便なりと思召。</p>	<p>亦柏手の公成是を 聞付給ひ。我を恨 ミ相果たる事不便 なりと思召。</p>	<p>亦柏手の公成是を 聞付給ひ。我を恨 ミ相果たる事不便 なりと思召。</p>	<p>柏手の公成是を聞 給ひ。我を恨ミ相 はてたる事。不便 也と思召。</p>
<p>3—21 〔萬葉集〕卷十 六・国歌大観番号 3788</p>	<p>耳なしの池し恨めし吾 妹子が。きつ、なれに し水はかれなんと。か やうに詠み給ひ。 と申し候。</p>	<p>耳なしの池も恨めし吾 妹子が。きつ、なれに し水はかれなんと。か やうに詠み給ひ。</p>	<p>それより櫻子の方へも 御通ひなく。愛念を止 め給ふと承り候。</p>	<p>夫より桜子をふつ と思ひ切り給ふ。</p>	<p>夫より桜子をふつ とおもひ切給ひた る由承る。</p>	<p>夫より桜子をふつ と思ひ切給ひたる 由承る。</p>
<p>3—22</p>	<p>誠に、哀れなる御事 にて御座ありたるけ に候。</p>	<p>誠に、哀れなる御事 にて御座ありたるけ に候。</p>	<p>それより櫻子の方へも 御通ひなく。愛念を止 め給ふと承り候。</p>	<p>夫より桜子をふつ と思ひ切り給ふ。</p>	<p>夫より桜子をふつ とおもひ切給ひた る由承る。</p>	<p>夫より桜子をふつ と思ひ切給ひたる 由承る。</p>

<p>3―25 〔萬葉集〕卷一・ 国歌大観番号13</p>	<p>3―24</p>	<p>3―23 〔仙覚の萬葉字説 の引用〕</p>
<p>又三山の事を萬葉集に載せられたるは。香久山は女山。畝傍山耳無山は男とあり。昔は山川も夫婦の契を結びしにや。耳無山初めに香久山を懸想じければ。何となくうけひく氣色なりしを。又畝傍山も香久山に思ひをかけしに。畝傍山は姿も雄々しく良かりければ。香久山これに心移りしにより。</p>	<p>互ひに争ひ戦ひしを。三山の戦とは申すげに候。</p>	<p>されば帝の御歌に。香久山は。畝傍雄々しと。耳無しと。相争ひき神代より。斯かるにあらしいにしへも。然にあれこそ虚蟬も。つまをあひうつらしきと。詠ませ給ひたると承り及びて候。</p>
	<p>それよりこの三山を一男二女の山とも申し候。</p>	

<p>アイの退場 4―①</p>	<p>3―②⑦</p>	<p>3―②⑥</p>
<p>是ハ奇特成シカク</p>	<p>是ハ奇特なる事を承り候ものかな。</p>	<p>最前申如く此儀にお き色々子細有けに候 へ共 先我等の承りたるハ かくの分にて候か扱 お尋はいかやう成ル 事にて候ぞ</p>
<p>是ハ奇特なる事を承り候ものかな。</p>	<p>シカク。</p>	<p>最前申す如く。此の 儀に於て。色々仔細 ありげに候へども。 まづ我等の承りたる は斯くの譯にて候 が。扱お尋ねは如何 やうなる御事にて御 座候ぞ。</p>
<p>狂言「これは奇特なる 事を承り候ものかな。」</p>	<p>ワキ一懸に御物語り候 ものかな。尋ね申すも 餘の儀にあらず。御身 以前に女性一人来ら れ。三山の子細唯今御 物語りの如く懸に語 り。桂子の跡とうてた べと申され候程に。如 何なる人ぞと尋ねて候 へば。何とやらん身の 上のやうに申され。そ のま、姿を見失うて候 よ</p>	<p>まづ我等の承りたるは かくの如くにて御座候 が。何と思し召し御尋 ねなされ候ぞ。近頃不 審に存じ候</p>
<p>●是ハ奇特成事仰 らる、物哉。</p>	<p>●是ハ奇特成事仰 らる、物哉。</p>	<p>是に付数多子細の ありとハ申せど。 先我等が存たるハ 斯のことくにて候</p>
<p>●是ハ奇特成事仰 らる、物哉。</p>	<p>●是ハ奇特成事仰 らる、物哉。</p>	<p>是二付数多子細の 有りと言へど。 先我等の存たるハ 如斯にて候</p>

4―⑥	御逗留の間ハ御用を承り候へし	シカく。	ワキ一頼み候べし		●何にても御用の事あらバ承ふずる	〔脇〕頼ミ候べし
4―⑤	御逗留の間ハ御用を承り候へし	シカく。 御逗留の内は御用を承り候べし。	狂言一御逗留にて候はば重ねて御用仰せ候へ		●何にても御用の事あらバ承らふずる	●何にても御用の事あらバ承らふずる
4―④		シカく。	ワキ一近頃不思議なる事にて候程に。暫く逗留申し。かの跡を懇に弔ひ申さうずるにて候			〔脇〕近頃不思議成事にて候間しバらく逗留申難有き御経を誦誦し彼跡を念頃にとふらひ申うすにて候
4―③	修行の道ハ御いそぎ成共暫御逗留有て桂子の跡を御弔ひいつ方へも御通あれかしと存候	修行の道は御急ぎなれども。暫く御逗留あつて。桂子の跡を弔ひ。何方へも御通りあれかしと存じ候。	桂子の御跡を御弔ひあれかしと存じ候	誠は昔語りとは申ながら。桂子の心中余りに痛敷事なれば。彼御聖に此由を申。融通念仏を以御弔ひ成さる、様に。申上ベきと存ずる間。此辺の人々ハ皆々。其分心得候へ	誠にむかし語りとは申ながら。余りに桂子の心中痛敷事なれば。暫く是に御逗留成され。迎の御結縁に融通念仏を以て。彼跡を御弔ひ成され。其後何国へもお通りあれかしと存ずる	誠にむかし語りとは申ながら。余りに桂子の心中痛敷事なれば。暫く是に御逗留被成。迎の御結縁に融通念仏を以て。彼跡を御とふらひなされ。其後いづくへも御通りあれかしとぞんずる
4―② (所の者の推量)	某すいりやう仕るに彼の桂子ハもふ執深き女なれハ此度名帳に付き念佛の効力を受佛果に至らん為ゆう霊是迄現れたると存候間	某推量仕るに。かの桂子は妄執深き女なれば。此度名帳につき。念佛の効力を受け。佛果に至らん為。怨霊これ迄現れたると存じ候間。	さては身を投げ給ひし桂子の幽霊現れ出で。御詞を交はし給ふと存じ候間。		扱ハお僧の御心中貴きにより。古への桂子の亡魂顕れ出。三ツ山の子細を語り申されたと推量致す。	扱ハお僧の御心中貴きにより。古への桂子の亡魂顕れ出。三山の子細を語り申されたと推量致す。

4 ⑦	心得申て候	心得申して候。	狂言「心得申して候といひて狂言は引く。」		●心得申候	●心得申候
--------	-------	---------	----------------------	--	-------	-------